

Views from Orienteering

村越 真



夜エイドで温かい汁物でしばしの休憩を取る富嶽周回の参加者。たった25人の参加だろうが、挑戦するアウトドアアスリートとして参加者を尊重し、サポートする。それが富嶽周回の考え方だ。

UTMF と富嶽周回

「日本初の100マイルレース」、ウルトラトレイルマウント富士も今年で2回目を迎えた。

100km以上を走った選手が、最高地点2000mを越える天子山地を無事通過できるだろうか。参加者から寄せられた用具やレースに関する質問を読んでいると、参加者のレベルに不安が沸いた。トレランやオリエンテーリングで数多くのイベントを運営した私も、不安にならざるを得ない。最後は、とうとう神頼み、スキンヘッドにして大会に臨んだのが2012年の第一回大会だった。救護チーフである私自身が選手のボリュームゾーンを追いかけて富士山の周囲を一周した。そして、最後は安全管理上大きなチャレンジである天子山地の麓に拠点を構え、さながら野戦病院のようなランナー回収作業を行った。

2回目となる今年は、運営体制も組織化された。今年はランナーを把握する安全管理システムも導入され、私はほとんどの時間を屋内の本部で過ごすことになった。

大会の知名度も集客力もあがった。第一回は100マイルにいったいどれだけの人が参加するのか、半信半疑だった。今年は1000人の定員があつという間に埋まった。海外からの選手が激増し、メディアの注目も集めた。なんでUTMFはたかだか2年で、これだけのイベントになったのだろう。

一つはコンテンツの良さである。日本人なら誰もが知っている、そして多くの人が登りたいと思う日本の象徴、富士山の周囲を回るイベントだということ。第二に、最初から100マイルという、チャレンジングなイベント作りを目指した点。第三に行政やボランティアをうまく巻き込んだ点。第四に、この分野のフロントランナーであるウルトラトレイル・モンブランとの姉妹大会やNHKでの放映など、パブリシティーやPRに多くのエネルギーを注いだ点。この大会を前線で運営していると嫌が応でも感じてしまう。その多くがオリエンテーリング界に欠けている要素だということ。

もっともメリットはリスクでもある。2200名の参加者を迎えれば、様々

な矛盾も発生する。彼らは要項をしっかり読み、アウトドアでの(半)自己責任を理解して参加しているのだろうか、運営者も含めた関連する他者へのリスペクトを持っているのだろうか、イベントが大きくなれば、どうしても商業的になる。商業的になれば、参加者はともにスポーツ文化を創り上げる仲間ではなく「お客様」となってしまう。これがトレランイベントのあるべき姿だろうか?という点は常に自問せざるを得ない。現実には、参加者の行動に疑問を感じる場面にも幾度か遭遇した。

UTMFの運営を手伝ってくれたIさんは、約1ヶ月後に僕が主催した富士山一周のイベントにも参加してくれた。こちらのイベントは広報もロコミだけで、参加者は25名。誘導はごく一部を除いてなし。その代わりに、地図にはこだわった。1:25,000をベースにした詳細なルート図を提供し、要所は写真で説明を加えた。エイドも3カ所設置した。自力で95kmを走りきろうとする人だけが来ればよい。その人たちのチャレンジにはリスペクトを込めて最大限のサポートをする。両方のイベントを知るIさんは、自身のブログに「どちらが本当の日本一のイベントだろうか?」と問いを投げかけていた。

たった一回だけ、世界最高峰のUTMBを見に行ったことがある。160kmを走りきった勇者に、沿道の観客が拍手をする。そんなことは当たり前だ。何より僕を感動させたのは、選手の後尾から歩いて誘導フラッグを回収しているスタッフが山麓のカフェを通過する時に、カフェの客が拍手でそのスタッフを見送ったことだ。選手と同じようにスタッフにもレスポンスの拍手が送られる。世界一の大会の神髄を見た思いだった。もちろん、実行委員長のカトリーヌが言うように、UTMBも参加者の意識という問題を抱えている。「選手とオーガナイザーが同じ意識を持って作り上げる大会」というのは、100マイルレースと同じように、過酷な道のりだ。

スポーツ文化を参加者とともに大きくむくむくとなるイベントを、これからも提供していきたいと思った。



富士山半周のSTYの選手をスタート後にハイタッチで見送る三好礼子実行委員（右端）。環境対策や地主対策での最大限の功労者である彼女だけに、「やっぱり現場はいいね」という言葉は重みがある。大きなイベントは「現場」のみでは成立しないこともまた現実なのだ。

初めてのナイトラン

2月の遭難事故で4人の知人・友人を失って以来、リスクマネジメントに関して何かをせずにはいられなかった。世話になっているスポーツショップのボスにも、通夜の場でそのことを話した。自然の中にリスクがあることを誰

もが本当に共有しているだろうか。厳しさを謳うトレランレースも、そのリスクに責任ある態度で向き合っているだろうか。もっと身近な啓発の機会が必要だ、と。

そうこうするうちに思いついたのが、「初めてのトレラン。いきなり夜かよ!？」スポーツショップアラジンのトレラン部はショップ付きのクラブだけあって、今や部員が100名を越える大所帯。中には地域のトレランイベントの運営に積極的に携わってくれる人も現れている。かつての地域オリエンテーリングクラブを彷彿させる。幸いにショップから賤機山トレイルには5分もあれば入れる。仕事を終えた平日の夜、ショップに集まり、トレイル走りに行ったら素敵じゃない?市街地に囲まれたこのトレイル、夜は夜景が綺麗だし、昼にはない非日常の世界を感じることができる。そして非日常的な魅力を生み出す、暗闇、静けさはすべてリスク要因でもあり、それは不安、怖さという形で実感できる。夜のトレ

ランでは、魅力/リスクが裏腹だという自然の中での活動の縮図がある。夜走することは、活動者にリスクを実感し、そのマネジメントの重要性を認識してもらう最良の方法なのだ。

予定していた1回の定員はすぐいっぱいになった。翌週に第二回を設定し、都合22人が参加した。第一回目では、途中急に林の木々がざわつきだし、突風が吹く気配が感じられた。寒冷前線が通過するのだ。視覚が制限された夜は、音や匂いにも敏感になれる。参加者の一人が、ゴール後の感想のシェアリングで、「匂いがすごく印象的でした」と話していた。

初めてだからこそ夜。リスクを顕在化させることは、リスクマネジメントの第一歩である。もっとも危険だと思われるその行為にこそ、リスク克服への近道がある。

運動会

小学校の6年生の時、運動会で勝って喜ぶクラスメイトを見て、「別に努力して勝った訳じゃないのに、なんでそんなに喜ぶのだろう」と、醒めた目で見ていた。小学校の運動会なんて、所詮その程度だと思っていた。小学校の校長になって、教員から、「本校の子どもは本当に運動会に必死になるんですよ」と言われても、「とは言え小学校の運動会でしょ」くらいに思っていた。

しかし、40年ぶりに関わる小学校の運動会は新鮮だったし、楽しかった。

運の要素の多いだるま運びや大玉転がしも、それはそれで楽しかった。徒競走も1、2年生はほほえましく、5、6年生は走りには見応えがあった。クラス代表による対抗リレーはエキサイトした。何より、表彰式で最下位だった黄色組の応援団長の6年生が悔しくて泣いていたのには心を動かされた。

「小学校にこの運動会がある限り、日本社会は永遠に不滅です」と、反省会で「校長先生のお話」をしたら、拍手喝采を浴びた。自分としては、リップサービスをしたつもりはない。俗世間では何の利益にもならないことに熱中し、上級生が下級生を指導し、同級生同士は協力しあう。思いを達成できなかったら泣くほど悔しい。これこそ世界の中で一定の評価を受けている日本の原動力となっているものだといっても過言ではない。

自分の子どもの運動会も一度は見に行けばよかった、と人生二度目の後悔をした。

(村越 真)



スポーツショップアラジンの前に集まる参加者たち。魅力は夜故だが、リスクは決して夜独自のものではない。夜はただそれを顕在化して見せてくれるだけだ。